

序

本書の企画は、2020年4月のコロナ禍のなか、Zoom面談にて、羊土社編集部の鈴木美奈子氏の「『胆膵内視鏡の診断・治療の基本手技』の姉妹書として、トラブルシューティング本をつくりませんか？」の一言からはじまった。

実は、トラブルシューティング本の発刊に関しては、自分のライフワークの一つである胆膵内視鏡手技に関する教科書の集大成として以前より考えていたことであった。しかしここ10年で、胆膵内視鏡に関して、interventional EUSという新たな手技も普及し、ERCP・EUS関連のデバイスが開発・改良されていることもあり、教科書的な本の出版に関しては時期尚早と感じていた。実際、以前よりいくつかの出版社からトラブルシューティング本のオファーをいただいていたが、これまですべてお断りしていた。しかし、新型コロナウイルス感染症により海外出張はなくなり、国内出張もWebとなり、本書作成のための時間が十分にとれるのではないかと（もっとも通常病院業務は逆に忙しくなったが）と考え快諾させていただいた。

本書には、2001年に東京医科大学で私が胆膵チームをつくってから、これまでに患者さんから経験させていただいた20年間の貴重な症例の写真や動画、そしてトラブルシューティングのコツが余すことなく盛り込まれている。とはいうものの、すべてのトラブルをわがチームだけで経験できるはずもなく、『胆膵内視鏡の診断・治療の基本手技』でもお馴染みのASTIA group（入澤先生、安田先生、良沢先生、潟沼先生と私）の面々のみならず、次世代を担う代表（岡部先生、中井先生、岩下先生）にも執筆していただいている。そういった点では、本書はまさに“胆膵内視鏡のオールスターズ”が自らのコツを余すことなく披露している最新の手技本であると自負している。ぜひ、自分のためのみならず患者さんのために本書を熟読して、トラブルシューティングにおける自身の引き出しを増やしていただくことを切にお願いしたい。

前述したように本書発刊は自分のライフワークの集大成ではあるが、これで完成ではない。手技やデバイスの進歩とともに、本書も改訂を重ねるたびに進化していくであろう。本書が10年後どのように進化しているか今から楽しみである。

最後に、大変お忙しいなか、早々に執筆いただいた先生方、本書をまとめてくれた東京医科大学胆膵チームの皆に厚く御礼を申し上げる。また、当初の予定より1年ほど遅れてしまった本書がJDDW2022で発売にこぎ着けたのも制作担当として加わった杉田真以子氏のおかげである。この場をお借りして改めて感謝の意をあらわしたい。

2022年9月

東京医科大学消化器内科主任教授
糸井隆夫